
八魔族特別室～夜刻～

東西南北

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八魔族特別室～夜刻～

【NZコード】

N8964C

【作者名】

東西南北

【あらすじ】

スランプのため更新停止します。スランプになつて半年。ひとまず更新を止め、プロットの練り直し、キャラの作り直しなどをしたいと思います。読んでくれていた方、ありがとうございました！作品はきちんと完成させますのでしばらくお待ちください。

俺は捨てて逃げた。

それからずっと俺はこの部屋に閉じ籠つてはいる。外界へと通じるのは、一つのドアと鉄格子のはまつた小さな窓のみ。外になんか出たくない…。

ただ時が過ぎ去つていく…

様々な物が雑然と溢れた部屋で吸血鬼と呼ばれる種族の俺は、小窓から降りそぞぐ日の光に気を付けながら寝転がり、手鏡を見つめていた。

青白い肌、漆黒の少々クセのある髪に紅い瞳の少年が本来なら鏡に映るはずだった。

しかし、俺の姿は映つていなかつた。

鏡に映らない自分を見るのが好きだ。映らなければ、嫌なアレを見なくていい。アレを見なければ過去も思い出さなくて済む…。

「暗い…

「うわつ…！…！」

耳元でボソリと言われて思わず飛び起きる。

な、なんだいきなり！？

振り返ると黒ずくめの長身が立つていた。

闇色の不揃いな髪のせいで顔はよく見えないが、髪の間から黄金色の瞳が見える。

身長はあるけど、細身の身体を金の飾りのある黒いマントですっぽり覆つ正在。

俺のよく知っている人物だ。

名前は『ヨイヤミ』

俺の腹違ひの姉で、（俺と同じ吸血鬼という種族）闇の魔族の女王でもある。

この世界には八属性の魔族がいて、（地・水・火・風・光・闇・時間・空間の八属性）それぞれの属性ごとに魔族の王 魔王がいる。黄金色の両眼は魔王の証だ。

「ヨイヤミか…いつから居たんだよ」

「我が居たのは四分九秒前…」

と、俺の影を指さす。俺の影と同化していたらしく…。付き合いが長いから何を言いたいのか大体理解出来る。そんな行動をとつた理由は分からなくとも。（何でそんなことしてたんだ？）

という疑問は胸にしまっておく。大した理由は無いだろうから。そんな事より、コイツが俺の前に現れたということは…

「俺に何か用があるんだろ？」

案の定そうだ、という答えが返ってくる。

「人間の国に働きに行け…。命令だ…」

信じたくない言葉を聞いた。俺はここから出たくない…。嘘だと言つて欲しい…！

「い、い、今なんて言つた！？」

聞き返しながらその言葉を発した姉に走り寄る。

慌てて走つたせいで、足元に散らばつていたガラクタなどを蹴飛ばしてしまつたけど、どうでもよかつた。

「我に同じことを言わせるな…」

怒氣のこもつた返事が返つてくる。いつもならこれ以上怒らせないよう素直に引き下がるところだが、今の俺は構わず詰め寄つた。それぐらい興奮していた。

「どうして俺が…！」

ヨイヤミがバサリと何かを広げた。かなり大きな灰色の紙が何枚か重なつている。

「なんだソレ?」

その紙には文字らしきものがびつしりと書かれていたが、俺には読めない。

「これは新聞といつもの…。人間の国で作られている…」

「しづぶん? そのしづぶんと俺が働きに行くことに何の関係があるんだ?」

紙の束と働くことは結び付かないと思つ。

「新聞には様々な情報が書かれている…。こじだ…」

パラパラと紙の束をめぐり、あるページを開くと俺に手渡した。紙を見てみる。やっぱり読めない…。試しに逆さまにしてみたが、結果は変わらなかつた。

「人間の文字は読めないな～…」

素直に言つたら、勉強しろと言われた。「う…勉強嫌いだ。ヨイ ヤミが俺から新聞を取り上げた。頭の悪い弟の代わりに読んでくれるらしい。

「記事によると、近年学校に行つたり、仕事をしない輩が増えている…。『元気こもつ』『ニート』と呼ばれ、問題になつてゐるらしい…」

そつ言つて、もつ何年もこの部屋から出でていな俺（俺みたいのを引きこもつといつんだらう）を見やり、続けた。

「私は放つておいてよい問題ではないと想つたのだが…。じつ想ひがシテ ク？」

じつ思ひ、と俺の意見を聞いていたが、実際のところ反対意見を言えれば酷い目に遭う。

それが俺 ヨコクと姉 ヨイ ヤミの力関係だ。

酷い目に遭いたくないが、かといって賛成意見を述べれば俺は働きに行かないといけなくなる。それも嫌だ。

俺は答えられず、沈黙した。

そんな俺にヨイ ヤミは荷物の入つたリュックを投げつけてきた。

思わず受け止める。見た目より重い。

よろける俺の足元にポツカリと黒い穴が開く。底が見えない。ヨイ ヤミの魔術だらう。

落ちれば人間の国に到着だ。

俺は落ちないよう必死によろける足を踏み留める。

しかし無情にも姉は

「引きこもってないで、仕事に行け……」

俺の身体を押した。

グラリと俺の身体は後ろへ……浮遊感を感じる。
俺はゆっくりと黒い穴の中に落ちていった。

ほんと沈みかけた夕日が空を朱く染める。少し強めの風が肌にあたつた。

気が付けば俺は広い場所に立っていた。

人間の国に着いたのか？

辺りを見回す。

沢山の人や魔族が行き交っていた。その風景に違和感を感じる。何で人の国に魔族がいるんだ？

たしか人と魔族は相容れず争つて、戦争していたはずなのに……。部屋に籠っていた間は外の出来事なんてどうでもよくて、無関心に過ごしていたけど……その間に何かあったのか？

「すみません」

それについても俺はこれからどうすればいいんだ？

「ヨウクさんですね」

やつぱり城に戻るのがいいよな。

でも今戻つたらヨイヤミに、『城中をピカピカにするまで一睡もするな』とか、『吸血鬼はどれくらい日光に耐えられるか』とか……とにかく酷い目に遭わせられそうだ……。

想像しただけで憂鬱になる。

「あの～聞いていますか？」

そういえばさつきから思考の合間に誰かの声がするよくな……。

「も、もしかして人違いでしたか？すみません…」

声の主が慌てて謝りはじめて、俺は無視し続けていたことに気付いた。警戒しながら返事をする。

「俺がヨコクだけど…誰だ？」

目の前には白髪の可憐な少女がいた。瞳は濃い青。年は俺と大して変わらなそうだ。所々レースのある服とミニスカートがよく似合っている。

俺にはこんな可愛い知り合いはない。

「私はコウといいます。ヨイヤミ様から話は聞いています。ヨコクさん、私達の所に働きに来てくれたんですね」

「ヨイヤミから？」

ヨイヤミの知り合いなら平氣だろ。警戒心を解く。にしても就職先まで決まっているらしい。そんなに働くかせたいのか。

「ずっと待っていたんですよ。それでは仕事場まで案内しますね」

そうこうでコウは歩き出した。

後をついていけば仕事場に行くことになる。…嫌だ。逃げたいけど、この国に一人でいるのは心細いな…。

しぶしぶとコウの後に続く。

とりあえず仕事場を一回見てみよう。それから『働かない』と言つても遅くないはずだ…。

空はすっかり暗くなつて、欠けた月と星が輝いていた。

コウは俺より少し前を人の流れに逆らつて速めに歩いている。

俺は人にぶつかってばかりで、口うになかなか追いつけない。

「アタクセーん、遅いですよー」

立ち止まつた口うに、俺はようやく追いついた。

「 もうちよつとゆつべつ歩けないか?」

運動不足のせいか、もう俺はバテバテだった。

口うは腕時計を見る。

「 もう少しゆづくらですか……でも……」

また腕時計を見る。

何か急がないといけない用事でもあるのだろうか?

「 用事があるのか?」

聞いてみる。

口うは腕時計から眼を離し、困った顔をして

「 実は、門限に間にあいそつもありません!…」

真剣な顔で言つた。

……なんだつて!?

門限? 親に決められてるのか?

口うは仕事場なんですけど…と続ける。(家の門限じゃないみたいだ)

「 七時半で閉まつてしまつんですけど、もう七時一十分になつてしま

まつて…どうしましょーつ…。」

入れなくなります…と悲しそうに呟く。本気で困っている。
俺はコウの悲しそうな顔を見てられず、思わず

「大丈夫だつて！俺がなんとかするからさー。」と言ってしまった。
「俺、こうみえて特技いろいろあるしけつこの器用だからどうにか
出来ると思う！」

特技は特になーし、手も不器用なんだけどうしたんだろう？嘘とハッタリばかりだ。
でもコウは信じたらしく

「本当にか出来るなんですかー？」ですなコクさん。
頼りになります！」

嬉しそうに笑つた。

その笑顔を見て可愛いと思いつつも、『もつ嘘でした』とは言えないと俺は思った…。

とりあえず俺はこの問題を考えるのを止めた。
考えたところで、いいアイデアが浮かぶとは思えなかつたからだ。
それに聞きたいこともあつた。

「あのさあ、俺の仕事つてどんな仕事？ それとこの国は人間の国
だろ。何で魔族がいるんだ？」
「ええつ！ コクさん知らないんですねー！」

ついぶん驚かれた。

この反応から察するに大抵の人は知つてゐるみたいだ。

なんだか知らないのが急に恥ずかしくなつて俺の口からまた嘘が出了。

「俺の住んでたところはすっぽり田舎で、全然噂や情報が入つてこないんだ」

そんな所に住んでるわけないだろ。一応闇の魔族の王族なのだから。自分の言葉に心の中でツッこむ。

「そうなんですか。それじゃあ知らないですよね。」

コウはまたあつさり信じた。
疑うということを知らないのか？

俺は嘘をついていたのを謝りたくなつてきた。意を決して謝罪うつと口を開いた時コウが話し始め、謝るタイミングを失つた。

「私達の仕事場は『八魔族特別室』っていうんですよ。」

八魔族特別室？

どんな仕事をするんだ？

「八魔族特別室のことを説明する前に、この国の事をまず話しますね」

少し長くなりますが前置きして話始めた。

「ウはやたら詳しく説明した。

「ウの話をまとめると、人と魔族の戦争は終わったとのことだった。人間達と主に戦っていたのは闇、空間、時間、火の四魔族。魔族が優勢だったのだが、数十年前のある事件が原因で戦争は膠着状態になっていた。

時の魔王が誕生しなかつたのである。こんなことは魔族の歴史上初めてだつた。

人間の場合、王が亡くなつたら王の息子が次代の王になるが、魔族の場合は魔王の血筋の中から次代の王に相応しいと判断された者の瞳の色が黄金色に変わり、その瞳を持った者が新たな魔王となる。時の王族に瞳の色が変わつた者はいなかつた。

時の魔王が存在しなくなつたせいで、時の国は混乱に陥り、戦争どころではなくなつた。

そして十数年前、闇の魔王が代替わりした。魔王ヨイイヤミは人間と戦う事を止め、和平交渉を始めた。空間、火の魔族は反対したが、闇の魔王は考えを変えなかつた。

空間、火の魔族は納得せず不満を持ちながらも、魔族の中でも強大な力を持つ闇の国の意志に従つた。

「魔族と人は共に生きていくことにしました」
「ウはそこで話をいつたん切つた。

「ここからハ魔族特別室の話に入りますけど、何か質問はありますか？」

何でも聞いて下さいねと、ニコラと笑つて言つ。俺の聞きたいことは…

「今の時の国は状態はどうなつてゐるかと、魔王は誰が決めるかを知りたい」

これが俺の最も知りたいこと。

この質問に対する答えを「コウは持つてゐるのだろうか。

期待と不安を持つてコウを見る。

コウの笑顔が消え、表情が沈む。ややして、答える。

「時の国は、国を治めるべき魔王が存在しないせいで混乱状態に陥つてしまい…国の治安は悪化する一方で、とても酷い」となつています…」

時の国はそんなことに…一気に空気が暗くなる。

「コウの表情も重く、悲しそうだ。時の国の事を考へてゐるのだろう。コウのそんな表情は見たくない。女の子は笑つてゐるのが一番だ。

「もう一つの質問の答えは？」

無理矢理話を変える。

「コウも暗い空気を変えたかったのか、わざとらしい明るい声で答えた。

「『魔王を決めるのは誰か』…まだ解明されてません。王族の中から選ばれますが、歴代魔王達の遺志とか、神が決めてゐるのだろう

とか、いろんな説があります。私が知っているのは「これくらい」です

この質問の答えをコウは知らないのか…。

現在の時の国のことを探ることが出来たけど、黄金色の瞳のことは分からなかつた。

俺は考えたい事があつて黙りこむ。しばらくの間無言で俺達は歩く。コウは様子を窺うように何度も俺の方を見た。そして心配そうな顔と声で言う。

「時の国のことが心配ですか？」

「何で俺が時の国心配をするんだよ？」

声は平静を保てたものの、心中はけつして穏やかじやない。バレたのか？

「だつてヨコクさん、時と闇のハーフじゃないですか。自分の国のことを中心するのは当たり前です！」

やつぱりバレてる。

「いつから俺がハーフだつて気づいた？」

「ヨコクさんの名前を最初に見た時です。夜刻 名前に時を表す字が入つていましたから」

名前か…。今度からハーフだとバレないよう、偽名でも使つた方がいいかもしない。

ハーフ＝混血魔族（俺みたいに別属性の魔族の間に産まれた子のこと）または人と魔族の間に産まれた子のことをいう。

ハーフは魔力、体力ともに純血魔族（同じ属性同士の間に産まれた子。魔族の98%は純血魔族）と比べて大幅に能力が落ちる。

それに別属性の魔族達はけして仲が良いわけでもない。

よつて別属性の魔族が結婚すると国と仲間を裏切つた異端者扱いだ。

ハーフは異端者の子供といわれ、忌み嫌われている。

ハーフを見分ける簡単な方法は、外見的特徴である左右色違いの瞳だ。

最近のハーフはハーフだと知られるのを嫌がり、人間の作ったカラーコンタクトをつけている。俺も紅い右眼は生まれつきのものだが、左眼は赤いカラー コンタクトだ。

コウは見たところ純血魔族のようだが、ハーフの俺を侮蔑したりせず、普通に話したりしてくれる。それだけで俺は嬉しかった。

そんな俺の気持ちを知つてか知らずか、コウは俺に話しかける。

「ミロクさんあの、ハ魔族特別室の話をしたかつたんですけど、する前に仕事場に着いちゃいました」

「ウの足が止まつた。俺も足を止める。

「ミロクが仕事場か…」

五階建てのかなり大きな白い建物だ。建つてから大した年月が経つていないので、傷や汚れは見当たらない。

入り口はガラス張りのドアで、ソファーや観葉植物などが見えた。建物の周りには背の高い樹が数本、間隔を空けて立つていて。

俺とコウは建物に近づけなかつた。

間に鍵のついた門があつたからだ。門には『本日は終了しました』と書かれた札が掛かつていて。

試しに門を開けようとしたけど動かない。コウが言つていた門限が過ぎたからだろう。

「それではヨウクさん頼みます」

そう言ってヨウは門から離れる。

すっかり忘れてたけど俺がどうにかするって言ったな… 何の根拠もなく。

チラッとヨウを見る。俺が失敗するなんて、これっぽっちも思つてない顔だ。

どうする、俺…。ヨウの期待を裏切りたくない。

ひとまず何かいい方法が思いつくまで時間稼ぎをすることにした。

「いろいろ準備もあるし、ここに入る前にハ魔族特別室の話を聞きたいんだけど……」

「ハ魔族特別室の話ですか？いいですよ。」

コウは快く了承した。

人と魔族の和平交渉は成功し、共存することになった。とはいっても長い間争ってきたため簡単に仲良く出来るはずもない。本当に共存は可能なのか？ 皆が疑問に思った。

そこである案が出た。

人と魔族が住む国 人魔国を造り、人と魔族が共に生きることが可能かどうか調べることにしようと。

結論をいえば、やはり人と魔族は今まで争っていたため、問題は絶えなかつた。しかしどうにかしなければいけない。そのために国は解決策として組織を設立した。

「ハ魔族特別室は人と魔族間のトラブルなどを解決するために出来た国立組織です。そしてここは人魔国です。」

コウが説明している間、俺は持つたままつと忘れていたリュックの中を探っていた。（コウの説明は一応聞いている）

ヨイヤミに投げ渡されたまま、まだ中を見ていない。もしかしたらこの状況を打破するような物があるかも……！

だがすぐに俺の希望は潰えた。リュックの中には厚い本、薄い本、大きい本、小さい本、とにかく本だらけだ。共通しているのは俺ながら絶対読まないような難しい内容ということ。

問題の解決に役立つちそうもない。リュックの中から本を次々取り出しては投げ捨てる。ほかに何かないのか！ リュックに突っ込んだいた右手が、リュックの底にあたる。

「細かく説明すると長くなるので、今はこれくらいにしておきますね。ヨクさん準備は出来ましたか？」

「じ、準備？ ええと…」

冷や汗がでて、俺の頭が空をさまよう。なんて答えよう？ ピリしてこういう時に限ってコウの説明は短いんだ…？

無意識にリュックの中をあわぐる。すると右手が何か固い物に当たった。…何だ？

右手に収まるサイズ。ヒンヤリと冷たい。少なくとも本ではなさそうだ。俺は少しだけ希望を持つ。ともかくそれを取り出し、おそるおそる右手を開いた。

見ると淡く光つた紺色の石。

石か…。

ため息をつく。再び希望が萎んだ。綺麗だけど、こんな物何の役にも立たない。

投げ捨てようと腕を持ち上げた時、

「さすがヨクさん！ 魔力石を持っていたんですね！」

「ウウが興奮した声をあげる。

「しかもとっても貴重な空魔石です！ これでビックリになりますね

！」

持ち上げていた腕を降ろす。空魔石？ この石でビックリにかかるのか？

「魔力石というのは、一見するとただの石ですが、魔力を蓄えるこ

じが出来る不思議な石なんです。その石は空間の魔力が蓄えられているので空魔石と呼ばれるんですよ。空魔石があれば、人間でも別属性の魔族でも空間系魔術を使えますー！」

聞く前にコウが説明してくれる。

つまりこの石で空間系魔術を使えばいいってことだよな？たしか空間系魔術はテレパシー、空間隔離、テレポート…テレポート？もしかして

「テレポートを使えばいいのか？」

「ヨコクさん、正解です」

コウがパチパチと拍手をする。

「それでは早速テレポートをしましょう！」

「でも俺、テレポートの魔術の使い方なんて知らないけど…」

俺は魔術の使い方なんて知らない。学校は通っていたことがあったけど、最初の魔術の授業。先生の言葉が忘れられない。

『ヨコク君、キミは自分が魔術を使えるとでも思つてこの授業に出ているのかね？ ハーフなんだから諦めなさい。前から言おうと思つていたのだが、いつまで学校に来るつもりだい？ ハーフがいると迷惑だ』

「ヨコクさんビビったんですね？」

気が付くと、コウが俺の顔を覗き込んでくる。

「何でもない。それより空魔石はハーフにも使えるのか？」

先生の言葉がまだ頭をちらつく。

「使えますよ。使い方は簡単！ 石に意識を集中して、行きたい所を念じるだけです」

コウの言葉を聞いて、俺の頭から先生の言葉が消えた。ハーフでも魔術が使える！ 俺は石を握りしめる。早く魔術を使ってみたい！ 目を閉じ、意識を石に集中する。石の光が輝きを増した。後は行きたい所を念じればいいんだな。心の中でハ魔族特別室と強く念じる。でも俺はハ魔族特別室には行つたことがないから、ただ言葉で思うだけだ。これで上手くいくのか？ 俺の頭に疑問がよぎる。石を握った手に、温かく柔らかいものが触れた。目を閉じているため、それが何なのか分からない。

と、突然意識と身体がぐにゃぐにゃと歪む感覚を感じて何処かへと運ばれた。同時にガシャーンと嫌な音が響く。

ガシャーンといつ嫌な音がした方を見ると、皿などの食器類、元はきちんと盛り付けられていたであつた料理が、見るも無惨に床に散らばっていた。

床を見る俺の目線は普段より高い。理由は部屋の中央に置かれたテーブルの上に俺とコウが立っているからだ。

テレポートで運悪くテーブルの上に移動してしまったらしい。つまり、床の悲惨な状態の原因が俺であることは明白だった。

とりあえずテーブルから降りようとした時に、俺の右手とコウの左手が触れ合っていることに気付いた。テレポートする人に触れていないと、一緒にテレポート出来ないのだろう。そう分かっていてもドキドキした。

コウも触れ合っていた手に気付き、慌てて手を離す。顔がいつもより赤い。

今までコウの手と触れていた右手を開くと、握りしめていた石は力を使い果たしたのか、粉々になっていた。

俺達は床に散らばった物を踏まないようテーブルから降りた。

「ここがハ魔族特別室か？」

コウに尋ねる。いぶかしげにコウは答えた。

「ここはハ魔族特別室なんですけど……でもおかしいんです。
「おかしい？」

部屋を一通り見回してみる。暖色系でまとめられた部屋。コウの趣味だろう、所々に可愛らしいぬいぐるみや花が飾られている。特に変なものは目につかなかった。

「

おかしい所はないと思つけど…」

「ヨゾラさんとトチさんがいないんです」

「ヨゾラとトチが？」

八魔族特別室のメンバーか？

「ヨゾラさんは八魔族特別室の責任者で、トチさんはヨコクさんと同じく今日から一緒に働く仲間です。私が探しできますねー。」

そういうとコウは駆け出していった。後には一人俺だけがポツンと残される。

えーと…

ただ立つてゐるのもアレだし何かするか。
さつきから気になつていていた床の料理と食器を片付けることにする。
割れた食器を拾おうとした時、強烈なニオイが襲つてきた。
「このニオイは…！」俺はバツとその場から飛び退き、壁際まで離れた。

ニンニクの臭い…！

よく見ればどの料理もニンニクが使われている。

これは俺に対する嫌がらせか、ニンニク好きかのどちらかだ。

ニンニクのせいで床を片付けられないまま、コウともう一人が戻ってきた。

「ヨコクさん申し訳ないんですが、トチさんと一緒に待つていてもらえますか？私、もう一度ヨゾラさんを探してきます」

コウは今来た道をパタパタと戻つていった。足音が遠ざかる。
一緒に働く仲間か…

「ウの言葉を思い出しながらトチの方を見る。歳は二十歳を過ぎた
ぐらいだろうか。ブラウンの髪と瞳。地味な男だった。特徴はかけ
ている眼鏡ぐらいしかでてこない。多分地属性の純血魔族だ。
トチは俺を馬鹿にした表情で見てくる。その表情で判る。ハーフが
嫌いなんだろ？ とても仲良くできるとは思えない。
トチが口を開く。

「ハ魔族特別室は各属性の魔族の代表が集まるはずなのに、なんで
ハーフなんかが居るんだ？」

「居たつていいだろ！」

喧嘩腰で返す。そんな俺を、トチは鼻で笑う。

「ハーフのくせに生意氣だな。じゃあお前何処の国の代表だよ？」

「…一応、闇」

ヨイヤミに送り出されたから、闇の代表でいいと思つ。自信を持つ
て言えないけど。

「闇だつて？ あの腰抜け女王の国の？」

俺の答えを聞いたトチがあざ笑う。

「腰抜け…！？」

腰抜け女王とはヨイヤミのことか！？ ヨイヤミが腰抜けじゃない
ことは、俺がよく知つている。
どうしてこんな奴に姉が馬鹿にされなきゃいけないんだ！！ 頭に
血が登つてくる。

「ヨイヤミは腰抜けじゃない！訂正しろ！…」

トチに怒鳴った。トチも負けじと怒鳴り返す。

「腰抜けを腰抜けと言つて何が悪い！ そのまま人間と戦つていれば魔族が勝てたはずだ！ なのに臆病風に吹かれた闇の女王が勝手に人間と和平交渉したんだろう！」

「ヨイヤミにはヨイヤミの考えがあるに決まってる！…」

一人の声は部屋中に響きわたる。

「闇の女王に考えなんかあるか！ アイツは人間ごときを怖がつた魔族の恥じ知らずだ！ 三大魔族（闇、時間、空間の三つ）の魔王も落ちぶれたな」

トチの言葉を聞いた俺は完全にキレた。トチの胸ぐらに掴みかかる。ハーフの俺だけじゃなく、ヨイヤミのこじまで馬鹿にしやがって…！

コロシテヤル

自分では止めることの出来ない衝動が俺を襲う。手をトチの首にかけ、力を込める。首の骨を折るのなんて簡単だ。

トチが苦しそうにもがく。俺は構わずトチの首を曲がることのない方向に曲げようと

ガツンと俺の後頭部に衝撃が走る。

なん、だ？

目の前が真っ暗になり、俺の意識が途切れた。

「ヨゾラさん、居ませんね……」

八魔族特別室の広い建物の中を、私はヨゾラさんの行きそうな部屋を中心に次々と見ていました。

でも見つかりません。ヨゾラさんが外に出るはずはないし……

途方に暮れた時、私はある物を思い出しました。

食堂にあつた料理です。

あの料理は私が作った物ではありません。そうすると建物の中に居たのはトチさんとヨゾラさん。

来たばかりのトチさんが勝手に料理を作るとは思えないで、残るはヨゾラさんのみになります。

私はキッチンに行ってみました。

キッチンに行くと、二ソニクの二オイがしてきました。二オイの元はまな板の上に大量に積まれた二ソニクの山です。

キッチンには予想通りヨゾラさんがいました。やっぱり料理を作ったのはヨゾラさんだつたようです。

ヨゾラさんは空間魔族で外見は十歳くらい。（でも私より長く生きてるらしいです）一見しただけでは少女か少年か判らない、中性的な顔立ち。腰までのばした艶やかな髪と、ちょっと眠たげに細められた眼の瞳の色は、名前の由来となつた夜の空のような深い色。あまりにも完璧に整つていて、熟練の者が精緻に造つた人形のよう。いつ見ても綺麗だなあと思う。

ヨゾラさんは夕飯時だとのにクッキーを黙々と食べていました。私は知っています。ヨゾラさんはイライラしてゐる時にお菓子を食べるということを。

何かあつたんでしょうか？

「どうしたんですか？」

私は不機嫌な理由を尋ねました。

ヨゾラさんはクッキーを食べる手を一回止めて

「俺特製の二ソニク料理がダメになつた」

と、淡々と答えました。（ヨゾラさんは何があつても、いつも感情を込めず淡々と喋ります）

食堂の料理はやっぱりヨゾラさんが作つたんですね。
きっとヨコクさんとトチさんを歓迎したかったに違ひありません！
でも…

「どうして二ソニク料理なんですか？ 吸血鬼のヨコクさんが食べられないですよ」

料理を作るなら、相手の好みも考えるべきです。

私の疑問を聞いて、食べる手を止めていたヨゾラさんはまたクッキーを食べ始めました。先ほどより速く。

そして私の疑問にテレパシーで答えてくれました。

『吸血鬼を追い出すための嫌がらせだ』

新しい仲間を追い出そうなんて思う人がいるはずありません！

「ヨゾラさん、照れ隠しにそういうことは良くありませんよ
私は少しだけ怒ったように言いました。それを聞いたヨゾラさんは

なぜかため息をつき、

「もういい。話したくない…」

クルリと私に背を向けました。私と話をしていると、いつもヨゾラさんは最後に背を向けてしまいます。私、的外れなことを言つたのかなあ？

「やういえばヨコクさんとトチさんは、食堂で待つてもいいですよ。早く行きましょう。」

私はヨゾラさんに声をかけました。

「たしかに早く行った方がいいな」

「そういってヨゾラさんはなぜかフライパンを手に取りました。そして一言

「でないとトチが死ぬ」

「トチさんが死ぬ？ どうしてトチさんが死ぬんですか？」

私の疑問には答えず、ヨゾラさんは私の田の前から消え失せました。テレポートです。

私はヨゾラさんの一言が気になり、急いで食堂に戻りました。

食堂に着いて私の視界に飛び込んできたのは倒れたヨコクさんとトチさん、二人の前に立っているヨゾラさんでした。傍らにはへこんだフライパンが落ちています。

私はうつ伏せに倒れているヨコクさんに駆け寄りました。

「ヨコクさんは大丈夫ですか！？」

ヨコクさんは微かにうめきました。後頭部にたんごぶが出来ているだけで、命には別状なさそうです。

次に私は仰向けに倒れているトチさんに近寄りました。トチさんは誰かに殴られたのか、鼻から鼻血を出しています。傍にはひしゃげて割れた眼鏡が転がっていました。

「ヨゾラさん、もしかして一人を殴つたり…してませんよね？」

「殴つたが悪いか？」

悪びれずにヨゾラさんは即答しました。

「悪いです！」

ヨゾラさんは八魔族特別室に新しい人が入つてくる度に嫌がらせ等をします。

そのせいなのか皆さんすぐに辞めてしまつのでした。ビリしてヨゾラさんはこうなんでしょう。

「ビリして殴つたりするんですか？ 一人が起きたらちゃんと謝つて下さいね」

「謝る理由が無い」

「理由が無いって…殴つたりなんかしたら謝るものなんです…」「トチを殺そうとしていたから、ヨコクを止めただけだ」

ヨコクさんが…！？ 信じられない…！

「もしかして見たんですか？（ヨゾラさんは空間察知の場所で誰が何をしているかリアルタイムで見る事が出来ます）でもヨコクさんがそんなことするわけありません！」

ヨゾラさんはふん、と鼻を鳴らし

「何故そう言える？ 今日会つたばかりのお前が」

他

私は言葉に詰まりました。たしかに三ノクさんは今日会つたばかりで彼の事はまだまだ知らない事ばかりです。

「でもそんなことをするようには思えません!」

「それはお前が三ノクの闇の魔族の一面を知らないからだ。闇の魔族は目的の為には親、兄弟、子でさえも殺す残忍な性格をしている。もちろん三ノクも例外ではない」

「そんな……！」

ひどいです。家族を殺してしまつなんて……。おわが三ノクさんも家族を?

「いいえ、三ノクさんはそんなことしません……」

私は言葉に出したけど、声には先ほどまでの勢いはありませんでした……。

俺は指の皮膚に焼けるような痛みを感じて目を覚ました。まだ高く昇つていらない太陽の光が窓から射し込み、指に当たつている。俺は指を光から遠ざけた。見ると指の先が黒ずんでいる。あともう少し光に当たつていたら、灰となつて崩れ落ちただろう。何があつたんだっけ……。

後頭部がズキズキと痛んだ。触ると少しく膨らんでいた。タンコブが出来ている。
たしか昨日トチを
殺そうとして……

ブルリと身体が震えた。俺は頭に血が昇ると壊したくなる。殺したくなる。そんな自分を止められない。あの時の感情を思い出すだけで気分が悪かつた。あんな気持ちを持つていたら昔の自分と変わらない。昔の自分なんて過去と一緒に捨てたはずなのに。捨てて生まれ変わらうと思つても、そう簡単には変われないってことか……。

ハアと重いため息をつき、俺は身体にかけられていた毛布をじけると起き上がつた。さつそくやらなければいけないことがある。トチに謝らないと……。昔の自分では絶対に出てこない謝罪の言葉。それを口に出そうと思つている分、少しほは変わったのかもしねい。

食堂から出た俺はトチを探し始める。

しかし思つていたより建物が広く、部屋数も多かつた。手当たり次

第にドアをノックし開けてみるが、トチどころか人影さえない。困ったなと思いつつ歩いていると、どこからかいい匂いが漂つてくる。そろそろ朝食の時間だな。

俺は食堂に戻ることにした。きっとトチも来るだろ。

食堂に戻ると探していたトチと、トチと対峙している小さな人物がいる。

一度見たら忘れられない美しいその人物を俺は知っていた。

昔会った事がある。

一度と会いたくなかった人物。

ヨゾラ

俺が来たことに気付いてヨゾラはこちらを見る。トチは俺に気付かず、ヨゾラに向かつて怒鳴つていた。

「どうして存在するんだ？ 空間の純血魔族が存在するはずがない！ とっくに滅びたはずだろ！？」

トチの声に、料理を並べていたコウが慌てて仲介に入つた。

「トチさん落ち着いてください」

トチはさらに激昂する。人差し指でヨゾラを指した。

「コイツと一緒に落ち着けていうんだ！」

トチが怒るのも無理はない。

空間の純血魔族といえばある能力で有名だ。

人の心を読む能力

他人に自分の心を読まれていても、落ち着いていられる人はそういうだらう。

この能力が恐れられ、純血の空間魔族は他の属性の魔族達と争い、滅ぼされた。生き残つたのは空間魔族の血が入つたハーフぐらい。だから純血の空間魔族 ヨゾラがなぜ存在するのか。

トチの疑問はもっともで、俺も知りたい。

「僕は部屋に戻るっ！」

トチはそう言い捨てる足早に去つていった。コウはトチが去つていつた方角を見ると

「今まで来た人達みたいに、トチさんも辞めてしまつんでしょうか…」

眼を伏せ誰ともなく呟いた。その呟きにヨゾラが

「辞めたい者は辞めればいい」

「どうでもよさげに答え、俺を見る。

「そここの吸血鬼も辞めたいのなら辞めていい」

俺の心にあつた『外に出たくない、働きたくない』という気持ちを読んだんだらう。心を読まれるのはあまりいい気分じゃない。

「ヨゾクさん」

「コウが心なしか眼を潤ませ俺に聞く。

「ヨコクさんも心を読める人がいるのは嫌ですよね？……やつぱり辞めてしましますか……？」

「コウの問い合わせにどう答えればいいのか…」。

正直に言えば働かないで帰りたい。でもそんなことを言つたらコウは泣いてしまいそうだ。たとえ帰つたとしてもヨイイヤミに酷い目に遭わされそうだし。

それに俺には心を読まれて困るような秘密は無い。いや、正確に言えばあるけどその秘密はヨゾラも知つていて。昔会つたのはその秘密に關してだからだ。

コウの問い合わせに対する俺の答えは決まった。

「俺はハ魔族特別室を辞めない」

俺の答えを聞いたコウは顔を輝かせ、涙を拭うと

「ほ、本当ですか！……一緒に頑張りましょっね！」

満面の笑みを浮かべた。

ヨコクにコウが嬉しそうに話かけている。そんな二人を食堂に残し、俺は自分の部屋に戻りドアを開けた。

明かりをつけていないため薄暗い部屋の中には、どつしづとした机の上に溢れた書類、本棚に收まりきらず床にまで乱雑に積み重ねられた本の山。

ごちやごちやと紙ばかりの空間の中で黒ずくめの長身ヨイイヤミが立っていた。

ヨイイヤミが口を開く。

「アゾク、やつそくだが命令だ……」

俺はテレポートでキッキンにあつたポテトチップスの袋を自分の手に移動させ、食べ始める。
ヨイヤミは構わず話を進めた。

「計画は終盤。仕上げはアゾラに任せらる……」

そこで言葉を切つた。俺をじっと見る。言わなくとも分かるだらうと。

思念が俺に流れこんでくる。

『アゾクを殺せ……』

思わずポテトチップスを食べる手を止めた。
そして俺はヨイヤミを睨み付ける。

「

最低だな

「最低？ 我は闇の女王、当たり前だ……」

無駄だとじつつもじつとう説得を試みる。

「アゾクはお前の事を信じてゐる。お前は弟を裏切るのか？
「我に姉弟の情などない……」

冷え切つた声。

説得はやはり無駄に終わった。

「用件は終わりだ。我は帰る……」

「もしかしたらクオンとやらが、我の邪魔をするかもしれない…。邪魔をするようならヨコクと一緒に殺せ…。我的命令は絶対だ…。」

声が響き渡り、やがて気配と共に消えていった。

ヨイヤミの命令。

どんなに嫌でも拒む事は出来ない。いつして俺の手は汚れていくのだろう。

俺は今まで幾度願つても叶えてもうなかつた願いを呟える。

誰か 僕を救つてくれ。

ヨコクさんが

「眠い」と言つたので、私は部屋へと案内しました。

今は朝ですが、ヨコクさんは吸血鬼ですから日中は寝て、夜に起きるそうです。私はヨコクさんの部屋を出るとトチさんの部屋へ向かいました。

ヨコクさんがハ魔族特別室を辞めなくて良かつたです。今までは私とヨソラさんだけで淋しかつたから、これから一緒に働くなんて嬉しいです。それに人数は多い方がいいです！

だから私はトチさんに『辞めないでほしい』とお願いしに行いつた
思いました。

細長い廊下の左側には大きめの窓が並び、右側には白いドアがいくつか並んでいる。

その廊下を私は歩いていました。 ゆめつじヨソラさんの部屋の前を通りかかった時、

「…クオン…邪魔…ヨコク…一緒に殺せ。…命令は絶対だ」

えつ……？

微かにですが、聞こえてきました。

聞こ覚えのない声……

『殺せ』って聞こえましたけど、『氣のせいですかね……？』

氣になつた私はヨゾラさんの部屋の前に立ち止まり、白いドアをジツと見つめました。

でも声はおひか、物音さえしません。私は思い切つてドアをノックして、

「失礼します……」

ドアノブをひねりました。鍵はかかってません。私は中に入りました。

暗い部屋の中にはヨゾラさんだけしかいませんでした。ヨゾラさんは明かりをつけ椅子に座ると、私を見ずに机に積まれた書類の確認を始めました。部屋中を見回しましたが、やはり誰もいません。私はおずおずと聞きました。

「ヨゾラさんだけですか……？」

ヨゾラさんは書類に目を落としたまま答えました。

「他に誰かいるよつに見えるのか？」

「あの、ヨゾラさん以外の誰がの声が聞こえたので……」

「声？」

この部屋に入つてから初めてヨゾラさんは私を見ました。

睨むよ。ついで

「なんて言つたか聞いていたのか？」

聞い詰めるよ。な響きを持つ声に、私は怖くなりました。でも何んている場合ではありません。私も聞かないといけない事があります。

「『ミノクさんを殺せ…命令は絶対だ』とか言つてました。ミノクさんを殺せつてどうこう事ですかつ！？」

ミノクさんは立ちあがると一歩一歩、私に向かって歩いてきました。

「ミノクは知りたいのか？」

「知りたいです」

私はミノクさんの眼を見つめつづと答えました。

ミノクさんは歩みを止めると、仕方ないなとドモこう話しがめました。

「ミノクを殺す理由は幾つかある。王族の血を汚すことか

一回言葉を切り、そして

「ミノク様がミノクさんを恐れていますからだ

「ミノク様がミノクさんを恐れる？」

そんなことあり得ません。ヨイヤミ様とくれば、魔王の座を手にいられる為に王族の血を引く従兄弟、叔父叔母、祖父母、親に兄弟まで殺した程の方です。そんな魔王が今さらヨロクさんを恐れるとは思えません。

けれども、そんな方だからこそ榮であるヨロクさんを生かしている事が不思議だったのです。いつ殺そうと思つてもおかしくないのです。

「だからとこつてヨゾラさんがヨロクさんを殺すんですか？ ヨゾラさんがヨイヤミ様の命令を聞く必要はないです！！」

「俺だつて出来るならヨロクを殺したいとは思つてない。……命令に逆らえない理由があるんだ」

「理由…？」

ヨゾラさんが命令に逆らえない理由……。それは一体何なんでしょう？
でも、命令に逆らえないからとこつてヨロクさんの命を奪つていいくじょうつか……？

ヨゾラさんはもう喋る気がないのか、私から窓の方へ顔を向けています。その横顔は何かを祈るように固く口を開いていました。

「ヨゾラさん」

私の呼びかけにヨゾラさんは疲れの見える顔で一瞬見ました。
私は私の思いをヨゾラさんに伝えようと思ひます。

「ヨゾラさん、私にはヨゾラさんが命令に逆らえない理由は解りません。だけでもコクさんの命を奪うなんて間違っています！ ヨゾラさんだって殺したくないんでしょう！？ だつたらそんなことしないで済むように、何か努力をするべきなんじやないでしょ！ うかー！」

ה'ה

ヨゾラさん目を伏せ、考え込み始めました。私の思いは伝わってく
れるでしょうか……。

どれくらい時間が経つたでしょう……？

長く感じましたが、実際は数分でしょう。ミソラさんは私を見ました。その眼はとても強い光を湛えていました。

「今まで諦めていた。どうにもならないと。希望を持ちたくない

「おまえのアパートナーハウスの間違ったなーんなのせもつ嫌だー。」

した。

私もヨゾラさんの為に出来る事はないでしょうか？

「アーヴィさん、私も出来る限りのお手伝いをさせてください…！」

「そうだな。一人でやるよりも一人でやつた方が
！－！」

言葉の途中でモジラさんの表情が凍り付きました。

「アーニ... もん?」

?

私の首にヒヤリと絡みつくような冷たい感触が。

な、なんでしょう…?

絡みついたソレを確かめると、視界の端に白い手が見えました。

そして後ろから手の持ち主の気配を感じます。

黒くて深い悪意の気配を。

「ヨゾラを見張つていて正解……」

頭上で声がしました。つにわつわヨゾラをたて命令していた声。

ヨイヤミ様。

でも、ヨイヤミ様本人ではないと判りました。私の影が形を変えてヨイヤミ様そっくりの姿になっているだけです。おれりべヨイヤミ様が遠隔操作で影を操つてているのだしじう。

「この女がヨゾラに余計な事を吹き込んだ……」

ヨイヤミ様の長い指に力がこもり、私の首をゆるゆると絞め始めました。

した。

私は首を絞める手を退けようと白い手を外そうとしました。けれども首に絡む指はまるで私の首にはりついたように剥がれません。

そのまま息がだんだん出来なくなつてきました。

「「ウを放せ」

こんな時でもヨゾラさんは淡々と言いました。でもその表情は怒つているようにみえます。

ヨイヤミ様の指にますます力が入りました。私は苦しくて頭がクラクラします。目の前もなんだかチカチカしてきました。

「誰に命令をしている?命令するのは我であつて貴様ではない……。わかつたら我に逆らうなどと愚かな行為は諦めろ……」

ヨイヤミ様の言葉を聞いてヨゾラさんは 諦めたように、がっくりと頃垂れました。

それを見たヨイヤミ様が満足そうに笑う氣配。

私は 謬謬とした意識のなか、一言だけ心の中で力一杯叫びました。ヨゾラさんが心を読んでいる事を願つて。

『諦めないでくださいヨゾラさん……』

私は意識を失いました。

俺達は走る。 音のした方向へ。

たどり着いたのは赤く染まつた部屋。血臭の充満する部屋に横たわつて、不吉な赤をいまだ流し続けているのは

俺 ?

ガバッと起き上がり、周りを見回す。血なんてどこにもない、見馴

れない小ぢんまりとした部屋だ。ベッドとサイドテーブルが置いてあるだけで殺風景な部屋。遮光カーテンの隙間から日の光が漏れている。時計を見ると十一時だった。

夢……？

そう、夢だ。

昔の。
俺が捨てた過去の。

ふう、と息を吐く。嫌な汗をかいていた。

あの光景。たとえ夢でも見たくなかった。ずいぶん前の事なのに、今でもはっきり思い出せる。そのたびに自分を責めてしまつ。

死んでしまつた。

俺のせいだ。

死ぬのは俺の筈だつたのに。

ポスツと枕に頭を埋めた。

……寝よう。

寝て忘れよう。

もう捨てた過去なんだ。

捨てて

やり直そうとあの時決めたんだ。

い。眠気はすぐにやつてくる。俺は夜行性で、日中に起きてる必要はない。

ふわあ、と欠伸をし

口に何か入れられた。

· % * ! ! !

猛烈な臭いと吐き気に襲われて、
「何か」を吐き出した。
ゴロリと床に転がったソレは

「……ンニク!?」

吸血鬼が苦手とする野菜だった。もちろん俺も苦手、というより嫌い。

「いつたい誰が？」

コウは絶対しない。
思い浮かぶのは二人。トチかヨヅラ。

二ン二クを映した視界の先に、小さな靴が見えた。

犯人はヨゾラか。

顔を上げると案の定ヨゾラが居た。 テレポートで部屋に入つて來たんだろう。 腕を組み、 不機嫌そうに眉をしかめている。

「こんな時間まで寝ているなんて、 いいじ身分だな」

「だからってニンニクはないだろニンニクはつ……」

「それは俺の作った料理を粗末にしたお前への罰だ」

たしかに昨日テレポートでテーブルの上に乗つて料理を駄目にしてな……。 あれはヨゾラが作った料理だったのか。

素直に謝るべきだろ。

「えーと、 料理ダメにしてゴメン。 悪かった

軽く頭を下げる。

ヨゾラは黙つたままだ。 上目遣いでヨゾラの表情を窺う。 眉間に皺を寄せ、 さつきより不機嫌そうだった。

「ヨゾラ?」

「それだけか?」

「へつ?」

俺は間抜けな声をあげた。

『それだけか』ってまだ何か足りなかつたのか?
とりあえずもう一回謝つてみる事にする。

「本つ本当にゴメン! 悪かった! !」

俺は深く頭を下げた。

「ヨコク、料理の事を謝るのは後でいい。……大事な話があるんだ」

「大事な話？」

俺は顔を上げた。めちゃめちゃ眠いんだけど……

「今すぐ話さないといけないのか？」

「そうだ、時間がない」

そう言つてヨゾラは入り口のドアを見る。つられて俺も見た。

ドアノブが静かに回っていた。

「ちつ」

横でヨゾラが舌打ちをする。

ドアがゆっくりと開き、入ってきたのは俺の姉 ヨイヤミだ
つた。

「ヨゾラ、ヨコク。我にも大事な話を聞かせろ……」

俺よりも背が高く、細くてあまり女らしい丸みのない身体。目の前にヨイイヤミがいる。昨日別れたばかりなのに懐かしく感じた。だけどそんな思いも ヨイイヤミが手に掴んでいるモノを見て吹き飛んだ。

白く長い髪を掴まれて、壊れた玩具のように引きずられているのはコウだった。

「コウ……？」

呼びかけてもコウはぐつたりしたまま動かない。俺はベッドから飛び降りた。

「ヨイイヤミ!! ……コウに何したんだよー! ?」

ヨイイヤミに駆け寄ろうとした俺を、ヨゾラは服を掴んで止めた。俺は勢いあまってつんのめりそうになる。慌てて腕をバタつかせ、バランスを取った。

「なにするんだよヨゾラー! !

「コウをヨイイヤミから取り返す。だから時間を稼げ」

怒鳴った俺にヨゾラが囁く。そして俺の背中を突き飛ばす。今度はバランスをとる暇もなくベチャリと倒れた。

スゲー恥ずかしい。

急いで起き上がって服をはたき、できるだけ何事もなかつたように

装つて俺はヨイヤミに近づいた。

『時間稼げ』と言われたけど、オーソドックスに話をして時間を稼いでみるか……。

先ほどの質問を繰り返した。

「コウに何をしたんだ?」

「イの女の事か……?」

そつぱうとコイイヤミは軽々と片手でコウの髪を引っ張りあげた。

コウの血の氣の失せた白い顔が露になる。首に赤い指の跡があつた。

「首を締めただけだ。まだ死んでない……」

「……どうしてそんなことをつー?」

「黙れっ!!」

ヨイヤミが急に声を荒げた。黄金色の瞳がギロリと光る。

「双子だけあって、我の嫌いなアイツにそっくりだ……。お前の顔など見たくない。話しかけるな……」

射るような眼で睨まれる。

双子……。

アイツにそっくつ……。

頭の中に舌葉がぐるぐると回る。

アイツ。
アイツ。

『アイツ。

『アイツ』の話は俺にとつて禁句^{タブー}
五十年前のあの日から……

血塗れの部屋で『俺』が倒れている。

チガウ。『オレ』ジャナイ。『アイツ』ダ。

『アイツ』が倒れている。

俺は血を流し続けているアイツ 兄を、血が俺の白い服の裾を汚すことも気づかずに呆然と立ちつくして見ていた。その間も血は、兄の黒い服に紅い染みを広げていた。

思考が止まる。

双子の兄をみて、自分が死んでいるのかと錯覚した。

俺と一緒に走ってきた男 クオンが兄に駆け寄ると、その血塗れの身体を抱きしめた。涙を流しながら。

やがて騒ぎを聞きつけた兵士や侍女や大臣やらが集まりはじめた。皆の会話が耳に入ってくる。

「お可哀想に。殺されるなんて……」
「まだ若かったのにね」

「でもまだ良かつたんじやないか？ 死んだのがエイコク様じゃなくてヨコク様で」

「そうだな。ヨコク様はあくまでエイコク様の『予備』だし。逆に死んで良かつたんじやね？ あの一人、兄弟なのに争つてたんだろ。邪魔者が消えたって事じやん」

死んで良かつた？

邪魔者？

俺つてみんなにそう思われてたのか？

薄々は気付いてた。

でも口で言わるとやつぱりショックだ……。

「エイコク
「クオン？」

いつの間にかクオンが俺の前に立っていた。その表情は冷たい。

「な、なに言つてるんだよクオン？ 俺はエイコクじやなくてヨコクだ！ 他の奴ならともかく、お前は俺達のこと見分けがつくだろ！？」

クオンは今まで双子である俺達を間違えたことなんかなかった。

「なにを言つてるとか解らないね」

クオンの表情変わらず冷たい。

「白はエイコク。黒はヨコクと決まってるんだよ。今、君は白い服を着てるじゃないか」

「…」、これはみんなに内緒で一人で入れ替わってみただけだ…！「その話が本当なら、エイコクはヨコクの代わりに死んだってことだよ？入れ替わらなければエイコクは死なかつた。どうしてエイコクが死ななくちゃいけない？お前が死ねば良かつたのに」

怖い。クオンの口は笑つてゐるのに、田は憎しみでギラギラしていた。

ジリジリとクオンから距離をとるため後退りする。

その僅かな距離はクオンの一歩であつていう間に縮まつた。

「…返せ。エイコクを返せ…！」

恐怖で動けなくなつた俺の両肩をガシッと掴まれた。肩に爪がくい込んで痛い。

「エイコクは皆に必要とされてゐる。ヨコクと違つてね。だから君はこれからエイコクとして生きるんだ。死ぬまでずっと。分かつたよね『エイコク』？」

俺はただ黙つて頷く」としか出来なかつた。

「…いい子だ」

そう言ってクオンは笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8964c/>

八魔族特別室～夜刻～

2010年10月22日00時01分発行